様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：３４５０４
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ１６９７９

研究課題名（和文）リベラル・ナショナリズム論の批判的再検討―グローバルな正義と民主主義の観点から

研究課題名（英文）A Critical Re-consideration on Liberal Nationalism: From a Viewpoint of Global Democracy and Justice

研究代表者
白川　俊介（Shirakawa, Shunsuke）

関西学院大学・総合政策学部・講師

研究者番号：５０７３７６９０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：英米圏の政治理論・哲学において1990年代初頭から中頃にかけて生じてきた「リベラル・ナショナリズム論」について、それは一般的にグローバルな正義やコスモポリタン・デモクラシーに批判的・懐疑的であり、グローバルな諸問題に対して解決策を示しうる規範理論たりえないという批判があった。だが本研究では、リベラル・ナショナリズムの議論の内在的かつ批判的な再検討を通じて、ナショナルな文化的文脈の意義を重視する立場から、理論整合的に導き出されるグローバルな正義およびコスモポリタン・デモクラシーの構想をつまびらかにすることを目的とした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
一般的には、ネイションという個別的なものに依拠することは、ともすれば内向きであり排外主義を招くと批判されがちである。しかしながら、本研究から、ナショナリティというものの理解を深めることによって、ネイションを重視すること＝内向き排他的であり、普遍的なるものと対立するという理解は必ずしも妥当ではないことが明らかになるように思われる。ゆえに、ネイションに対する不毛な批判を避け、ネイションをある意味で引き受けたうえでの社会・世界構想の提示するうえでの手がかりに本研究はなりうる。

研究成果の概要（英文）：I focus on a theory of "liberal nationalism" which has emerged in the early 1990s and in the mid-1990s in political theories and philosophies in Britain and the United States. Some argue that it is skeptical of global justice and cosmopolitan democracy, and cannot be a normative theory that could indicate a solution to global issues. However, in this research, I tried to clarify a conception of global justice and cosmopolitan democracy which is derived theoretically from the standpoint of emphasizing the significance of nationality through an intrinsic and critical review of the liberal nationalists' arguments.

研究分野：政治哲学

キーワード：リベラル・ナショナリズム　グローバル正義　コスモポリタン・デモクラシー　移民正義論　ナショナリティ　動機

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

英米圏の政治理論・哲学において 1990 年代初頭から中頃にかけて生じてきた「リベラル・ナショナリズム論」はすでにある程度の理論的地位を獲得しているように思われる。しかしながら、リベラル・ナショナリズム論についてはしばしば次のような批判が投げかけられてきた。すなわち、それは一般的にグローバルな正義やコスモポリタン・デモクラシーに批判的・懐疑的な議論であり、グローバルな諸問題に対して解決策を示しうる規範理論たりえないというものである。かかる批判はある程度当たっており、残念ながらリベラル・ナショナリズムの理論家自身も、当座のところ、理論整合的な形でグローバルな正義や民主主義の構想を提示するに至っていなかった。

２．研究の目的

１．で述べた理論的背景を踏まえ、本研究では、そのようなリベラル・ナショナリズムの議論をさらに一歩進め、リベラル・ナショナリズムの議論を内在的に批判的に再検討・再解釈する作業を通じて、ネイションへの帰属意識やナショナルな文化的文脈の意義を重視する立場から、理論整合的に導き出されるグローバルな正義およびコスモポリタン・デモクラシーの構想をつまびらかにすることを目的とした。

３．研究の方法

本研究を進めるにあたり、まずリベラル・ナショナリズム論について、とりわけそのネイション解釈について理解を深めるところから始めた。デイヴィッド・ミラー著『ナショナリティについて』（*On Nationality*）やウィル・キムリッカ著『土着語の政治』（*Politics in the Vernacular*）など主要なリベラル・ナショナリストの著作や論文について、とりわけネイションやナショナリティの解釈にまつわる部分を精読し、理解を深めた。そのうえで、グローバルな民主主義を支持し、リベラル・ナショナリストを批判するいわゆる「コスモポリタン」の理論家の議論を精読し、彼らのリベラル・ナショナリストからの批判を丁寧に吟味し、コスモポリタンからの批判を回避しうる、あるいは、彼らの批判に十分に応えうるリベラル・ナショナリズムから導出されるコスモポリタン・デモクラシーの構想を詳らかにしたい。また、グローバル正義論については、本研究の起点となるデイヴィッド・ミラー著『ネイションの責任とグローバルな責任』（*National Responsibility and Global Justice*）およびその本を批判的に検討したデ・シュッターとティンベルト編『ナショナリズムとグローバルな正義』（*Nationalism and Global Justice*）を再度精読し、特にミラーがグローバルな正義を論じる上でのキータームとして用いている人権概念の精緻化と明確化を図る。そのうえで、ミラーはリベラル・ナショナリズムの立場からグローバルな正義を適切に論じることに成功しておらず、リベラル・ナショナリズムを前提とするならば、グローバルな正義は抽象的な原理としての人権ではなく、なんらかの「感情」に基礎づけられる必要があるという点を明らかにしたうえで、さらに、グローバルな正義を動機づける「感情」を明らかにするために、リベラル・ナショナリストのネイション概念およびそれと正義構想との関係について基礎的な文献を改めて精読し、ナショナルな情緒的紐帯の意義を再解釈しようと試みた。

４．研究成果

研究期間全体を通じて、ナショナリティという個別的な概念と、コスモポリタン・デモクラシーやグローバル正義というある種の普遍性を志向する概念をどのように調和させるかということを規範的に検討してきた。リベラル・ナショナリズム論の要点を「動機の調達」にあるとした場合に、ナショナルな動機づけという個別的なものと、普遍的な概念とをさほど無理なく接合できるということを、ネイション概念の再解釈を通して、ある程度は論じることができたのではないかと考える。しかしながら、研究開始当初の見込みとは異なり、十分に論じることができていない部分もまだ残されているため（とりわけコスモポリタン・デモクラシーの構想については深めることができなかったし、グローバル正義についてもその具体的な構想までを提示するに至らなかった）、その点は今後の研究においてさらに深めていきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計４件）

1. Shunsuke Shirakawa, “Can Liberal States Coercively Restrict the Right to Leave? Brain Drain, Migration, and Global Justice,” *KWANSEI GAKUIN UNIVERSITY HUMANITIES REVIEW,* 査読無し, vol. 23, pp. 1-18, 2018.
2. Shunsuke Shirakawa, “A Philosophical Inquiry into an Emotional Motivation for Global Justice: Based on a Critical Reflection on David Miller’s Arguments,” *KWANSEI GAKUIN*

UNIVERSITY SOCIAL SCIENCE REVIEW, 査読無し, vol. 22, pp. 33-50, 2017.
3. 白川俊介、「「頭脳流出」はいかなる道徳的義務を喚起するか――「移住のグローバル正義論」序説」、『総合政策研究』、査読無し、第 54 号、2017 年、29-40 頁。
4. 白川俊介、「ジョージ・オーウェル『動物農場』の政治哲学的含意についての一試論――ネオリベラル・ディストピアに抗して――」、『九州龍谷短期大学紀要』、査読無し、第 62 号、2016 年、35-62 頁。

〔学会発表〕（計１２件）

1. 白川俊介、「ポピュリズムとナショナリズム――政治哲学的一考察」、地域紛争研究会、同志社大学、2019 年。
2. 白川俊介、「『退出の権利』に対する制約の正当化に関する一考察――『移住のグローバル正義論』の構築に向けて――」、九州大学政治研究会 2018 年度 12 月例会、2018 年。
3. Shunsuke Shirakawa "Global Justice and Nationality: Reinterpretation of Liberal Nationalist's Approach," International Political Science Association 25th World Congress, 2018.
4. 白川俊介、「政府は『退出の権利』を制限できるか――『頭脳流出』とグローバルな正義」政治思想学会第 25 回研究大会、2018 年。
5. Shunsuke Shirakawa "In Defense of the Right to Remain: A Case against Open Borders" 7th International Conference on Social Science and Humanity, 2018.
6. 白川俊介、「グローバルな正義と故国に「留まる権利」:「移動の自由」についての批判的一考察を手がかりに」関西倫理学会 2017 年度研究大会、2017 年。
7. 白川俊介、「「リベラル・デモクラシーと公共精神――規範的一考察――」、日本公共政策学会関西支部第 50 回例会、2016 年。
8. 白川俊介、「新自由主義的世界におけるナショナリティの規範的重要性の再評価に関する若干の考察」、社会思想史学会第 41 回大会、2016 年。
9. Shunsuke Shirakawa " A Crisis of Representative Democracy and Rise of Democratic Social Movements in Recent Japan: A Normative Analysis on Abe Politics," International Political Science Association 24th World Congress, 2016.
10. 白川俊介、「新自由主義的グローバリゼーションとデモクラシーの行方――ジョージ・オーウェル『動物農場』についての考察を手がかりに――」、九州大学政治研究会 2015 年度 12 月例会、2015 年。
11. 白川俊介、「グローバルな正義の動機づけに関する一考察――デイヴィッド・ミラーの議論の批判的検討を手がかりに――」、日本法哲学会 2015 年度学術大会、2015 年。
12. 白川俊介、「マルチナショナルな世界におけるネイション間の正義の問題――規範理論的一考察――」、日本国際文化学会第 14 回全国大会、2015 年。

〔図書〕（計１件）

白川俊介、「リベラル・デモクラシーを下支えする公共精神をどこに求めるか――新自由主義的世界におけるネイションの規範的重要性の再評価――」杉田敦編『デモクラシーとセキュリティ――グローバル化時代の政治を問い直す――』、法律文化社、2018 年、pp. 115-135。

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。